

氏 名（本籍）	こ いずみ たかし 小 泉 卓（愛 知 県）
学 位 の 種 類	博 士（芸 術 学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 4125 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	子どもの美意識の発達段階と多様性

主 査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	齊 藤 泰 嘉
副 査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	直 江 俊 雄
副 査	筑波大学教授	博士（美術）	金 子 一 夫

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

本論文は、美意識が美を成立させる意識や体験を意味しており、その過程には感覚、感情、表象、連想、想像、思考、意志など多くの心的諸要素が複合されているという観点から、子どもの美意識の発達段階と多様性を考察することを目的としている。

（対象と方法）

本論文の研究対象は乳幼児から青年期前期に至る子どもの美意識であり、本論文の研究方法は子どもの美意識に関する主要な文献の検討と個々人への聞き取り調査に基づいている。

（結果）

本論文は、序章、1～5章、終章から構成されている。

序章においては、研究の動機と背景、目的と方法、章立てが示されている。

第1章においては、美意識の概念規定に基づいて、美意識と視覚性、及び美意識とコミュニケーションの関係を論究している。美術の視覚性について、可視的形式としての視覚性と見る－見られるという関係としての視覚性の二つがあることを指摘し、子どもの絵・絵本・漫画などの平面性、連続性、様式性に関して言及し、子どもの絵の発達段階における視覚性の特質を論じることにより、美意識と視覚性とを関連づけようとしている。さらに、パーソンズ（M. Parsons）やハウゼン（A. Housen）による現在の美意識の発達段階論が基盤としているコールバーク（L. Kohlberg）の道徳性の発達段階説を援用し、道徳性の発達に不可欠なコミュニケーション能力と美意識との関係を、美術館での作品を前にした対話型ギャラリートークの事例を通して、解明しようとしている。

第2章においては、子どもの美意識が具体化されたものとしての子どもの絵に関して、その発達はどうに理解されてきたのかを検討している。子どもについての概念を規定し、リュケ（G. H. Luquet）、リード（H. Read）、ローウエンフェルド（V. Lowenfeld）、アルンハイム（R. Arnheim）、ガードナー（H. Gardner）の20世紀における代表的な子どもの描画の発達段階論の諸説を検討することにより、子どもの絵の発達段階

における美的契機を抽出して、子どもの美意識の発達段階と多様性を理解する視点を確定しようとしている。

第3章においては、子どもの美意識と多様性について日本において学際的視点から取り組んだ外山卯三郎と鳥居昭美の二つの先駆的研究を検討するとともに、子どもから成人を含む人々に対する鑑賞支援教育において現在のところ最も有力な美意識の発達段階論とみなされているアメリカのパールソンズとハウゼンの二人の理論を比較検討している。その結果、子どもの美意識の発達段階と多様性を理解するには、美学や芸術学、心理学や教育学などの複合的な視点が必要とされることを指摘している。

第4章においては、美意識における「主観－客観関係」を基軸にした発達段階と多様性の構造について究明している。ヘーゲルによる「理念と形態」の関係からの芸術の発達段階（象徴的、古典的、浪漫的）、山本正男による芸術の美的分類の多様性、トゥアン（Y. Tuan）による美意識の形成の重要な契機となる個人空間の誕生と発展などの諸説を援用して、「主観－客観関係」の展開の仕方が美意識の発達段階の構造を規定し、主客いずれかへの傾斜によって美意識の多様性が構造化され、自己意識の発達が子どもを取り巻く空間の文節化に対応していることを究明している。

第5章においては、事例調査に基づいて子どもの美意識の発達段階と多様性を検証しようとしている。小学校1年から6年まで毎年絵本を描き続けた成人、小学校3年ころから現在までマンガを描き続けている大学生、幼児から現在まで絵画を描き続けている大学教員のこれら3人を対象に、それぞれの過去の作品を前にして、美意識の発達過程を口述してもらい、それを聞き取るという調査を実施して、これらの調査事例から子どもの美意識の発達段階と多様性を過去に遡って跡づけている。

終章においては、(1) 子どもの美意識の発達段階は、「主観－客観関係」としての美意識の未分化・分化・統合という展開の構造に規定され、自己と対象との関係における非対象化・対象化・統合化の発達段階と相互性を有すること、(2) 子どもの美意識の多様性は主客いずれかへの傾斜によって引き起こされること、という本論文において考究された研究結果を提示している。

(考察)

本論文では、子どもの美意識とは、自己の主体的な表現・鑑賞活動を核とする感性的活動を通じた自己（主体）と対象（自然・社会・文化・人間）との相互交渉の発達過程において創造される美的価値の体験であり、この美意識が創造的であればあるほど多様性を獲得することを考察している。本論文の終章においては、以上のような考察をふまえて、ここで提起された子どもの美意識の発達段階論を今後の美術教育の実践に適用する方途を探索している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

一般に美意識とは、心理学的観点からは「美的態度における意識過程」を、哲学的観点からは「美的価値に関する直接的体験」（「美的価値体験」あるいは略して「美的体験」）を、それぞれ意味する。それゆえ、著者が本論文において、美意識が美を成立させる意識や体験を意味しており、その過程には感覚、感情、表象、連想、想像、思考、意志など多くの心的諸要素が複合されているという観点から、子どもの美意識の発達段階と多様性を考察したことは首肯できる点である。

子どもの絵に関する発達段階の理論は、子どもの描画の造形性の縦断的変化を対象にしたリュケによる研究に始まり、今日まで主として心理学的観点から行われ、一定の研究成果が見出されてきた。著者は、こうした子どもの絵を中核とする発達段階の諸説に含まれる美意識（「美的態度における意識過程」）の記述を精緻に分析した上で、子どもの美意識に関する先駆的研究や先端の研究成果に基づき、彼らの美意識を解明するには美学、芸術学、教育学などの複合的な視点が必要とされることを検証した。

著者は、さらに進んで哲学的観点から美的価値に関する直接的体験に関心を向け、「主観－客観関係」の

展開の仕方が美意識の発達段階の構造を規定し、主客いずれかへの傾斜によって美意識の多様性が構造化されるという見解に達して、これを子どもの美意識に適応した。

概説的には、美は自己（態度や活動）と対象（形状や形態）との間の緊張関係において成立し、この両者の統一によって美的価値が成立するので、美学上の諸問題は「主観－客観関係」において考究される。元来「それ自体において存在する」認識対象とは違って、本質的にはただ「われわれに対して存在する」対象の意識が美意識とみなされる。それゆえ「主観－客観関係」としての「美的価値体験」（美意識）はきわめて動的で創造的な志向性を有することになり、そこに著者による美意識の発達段階説（未分化・分化・統合）やその多様性（非対象化・対象化・統合化）の主張に関する一定の根拠を見出すことができる。

著者は、美意識の発達段階や美意識の多様性に関する自らの所論に基づいて、3人の被験者に子どもの時期の彼らの作品を前にして美意識の発達過程を口述してもらい、それを聞き取るという調査を実施した。こうした事例調査から子どもの美意識の発達段階と多様性を検証しようとしたことは有意義であり、著者による今後の研究成果が大いに期待されると評された。

著者は、児童美術の研究者として20年以上の研究歴を有しており、現在は大学の児童学科において教鞭をとっている。そのかたわら、本研究科の芸術学専攻に編入学し、貴重な研究時間をさいて博士課程の院生として、3年にわたり熱心に勉学を続けた。著者の真摯な学究的態度や強固な研究意欲は、他の学位取得をめざす院生の模範となり、周囲に学術的刺激を提供した。この期間を活用して長期にわたる自らの研究成果を集約した本論文は、精緻な文献的考察に基づいて、児童学における子どもの美意識という困難な問題に哲学的観点から真正面から取り組んだ希少な研究であると評価された。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。